

---

# ヒーローメーカー！

水無月 一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヒーローメーカー！

### 【Nコード】

N6189Z

### 【作者名】

水無月 一

### 【あらすじ】

宇宙で唯一の星立であり、様々な種族が混在する学校、桜花繚乱高校。そこに合格して通うことになった1人の少年とその仲間たちの戦いと学園生活を紡ぐ運命の物語。彼らの進む道の先にあるものは明るい未来か、それとも黒い絶望か。

笑いと悲しみの学園ファンタジーにするつもりです。

## 第一章 黒鋼色の目を持つ少年（前書き）

初投稿です。至らぬ点があるかもしれませんが、優しく見守ってください。よろしくお願いいたします。

## 第一章 黒鋼色の目を持つ少年

星立桜花繚乱高校。通称サクラ高。

銀河を巻き込んだ大戦を終結させて全ての星に他の星と平和条約と不可侵条約を締結させた、辺境の星に住んでいる学校にも行っていないような小さな子供でも知っている伝説の英雄とその仲間たちが建立に尽力したと語り継がれる、皇立でも帝立でも法立でもない銀河で唯一の星立高校である。

伝説の英雄の建設総指揮、有名設計者のデザイン作成、技術屋集団の技術投入などフロウラル星にある力を全て注ぎ込んで建てられた学校だから、人気の高さによる入学の倍率の高さ、他には見られない前衛的な学校の景観、近代的な設備その他諸々の特長で名が通っている。

中でも異星間交流と英雄の輩出理念の二つが特に顕著だ。

サクラ高は平和の象徴を体现する一環として、普通の学校よりも積極的に他の星からの入学や転学を推進している。その為、サクラ高があるゲツケイジユ皇国には様々な種族がゆったりと闊歩している。

種族や個体によって髪や皮膚の色はまちまちなので、もし鳥瞰で見ることができたら国はカラフルに彩られていると分かるだろう。それを実際に見れるのはごく一部の状況に置かれている人間だけであるが。

サクラ高では、どの学校でも当たり前として習う数学や語学から選ばれし者しか学ぶことがない農学や帝王学、さらには魔法学までを入学時から必修科目として、長所を伸ばしたり短所を克服したりする為の分野を二年目から選択科目として学ぶことができる。

こんな特殊な学習体制を敷かれるのも、全ては人の上に立つ器を持つ人間の才能を発掘、養成して学界、政界、芸能界などあらゆる業界に英雄やスターを送り出す《英雄鍊成》のスローガンを果たす

ためだ。

こうなったのも当然と言えば当然である。何せ英雄が建てた学校なのだから。

ちなみに英雄を大量に生産するから安いと考えられているからだろう、サクラ高では入学金、寮費、学費が一切かからない。

今、そんな尋常とは決して思えない学校の校門前に、涼しい顔をしてはいるが喜びや期待といった良い感情を黒色の鋭い目に湛えた一人の少年が佇んでいる。

少年もまた、サクラ高に通うことになった学生の一入である。

この学校に通う為に少年はサクラ高の受験生の数倍という計り知ることは到底無理なほどの努力をしてきた。

それもそのはず、少年は特徴を探すのに骨を折らされる種族、ニンベンであるからだ。

## ニンベン

あらゆる種族の特徴、能力を全て平均化したような種族。他種族の基礎となっている。銀河一個体数の多い種族でもある。

優れた面や飛び抜けて目立った特徴がないと進級や卒業することはおろか、入学もままならないようなサクラ高はニンベンからしたら雲の上の存在である。

そんな考えがはびこっていても、少年はニンベンとして数少ない合格者の一人となったのだ。

サクラ高では人柄や個性を重要視しているので面接の配点が他校よりも遥かに高い。

それでも少年は、筆記試験では賢良種族が、実技試験の『受験生全員でバトルロイヤル』では身体能力が高い種族または戦闘種族が好成績を収めている中で大健闘していた。

何故少年がここまで頑張るのかというと、英雄に憧れていたりたいと思うていたりしたからではない。ただ単に、学費と諸経費

が無料だからと大きく夢に近付ける気がしたからである。後者はこの入学試験の難易度や実技における周りのレベルの高さ、面接の質問の内容の深さからそれは予想から確信に変わっていた。

そんなことを感じていた上に合格が決まったから、クールな性格をしている少年でも喜びを抑えられずに制服を着て学生寮を飛び出して下見に来たという訳だ。

しかし、その行動も空振りに終わった。まだ春休みであつたから校門は閉まっていて、校内には人がいる気配がしなかったのだ。代わりに少しさびしそうにその場を去る少年の後ろ姿があつた。

だが、少年がめげることはなかった。まだ他にも楽しみがあつたからだ。

前述した通り、ゲツケイジュ皇国は多くの種族を抱えている。いわゆる『種族のるつぼ』である。その為、この国は宇宙に存在する星の数と同じだけの文明を折衷しており、物質文化や精神文化などを独自のベクトルに発展させている。それは食文化にも該当する。要するに、この国にはおいしい食べ物で溢れかえっているのだ。

いつもは育ての親の家でご飯を食べているから外食する機会がほとんどなかった。なので、少年は今日の昼食を楽しみにしていたのである。

元々貧乏な家で育ったから小遣いは雀の涙ほどしかないが、物欲は全くと言っていいほどなかったから学生としては結構な額を貯めることができたのでここでいくらか使おうと思っていた。

サクラ高の周囲は雑貨屋や本屋、ファッショショップなどを集めた商店街と学生向けに大量に食べることができる料理を安く提供するフードコートでひしめき合っている。こうなったのも、フロウラル星がゲツケイジュ皇国を学園国家にするという政策を施行したからである。

そういう訳で、この辺りには質のいい店がいっぱいある。そんなことを考えながら、少年は横道からアーケードに入って散策を始めた。

せつかくいうことで、少年はフードコートではなく商店街にあるレストランか飯屋で昼食を摂ろうと思っていた。

案の定そこには知識でしか知らないようなものが多く売られていて、少年にとってそこは新鮮な印象を与えてくれる面白い空間だった。

そのエリアは比較的小規模の商店街ではあるが、いろんな星から集めて愛玩できるようにしたペットショップの動物、まだ読んだことがないような異文化の学術書、おそらくは工業の発達した星で作られたのであろう高性能テレビや災害時用ラジオといった品々が少年の目に飛び込んで大いに心を踊らせた。しかし、昼食を食べるという目的は忘れないでいた。

少し歩いていると、首飾りや民族衣装などを取り扱っている装飾店と先刻からどう見ても堅気とは思えない人達が入り込んでいるギャンブル場らしき場所との間に、木造建築で存在感たっぷりの小ぢんまりとした飯屋がぽんと置かれているのを見つけた。

その飯屋の第一印象は『年季が入った老舗料理店』であり、少年がそこに入る理由としては十分過ぎるものだった。

「『割烹店 豚珍甘』……」

少年は店の名前が書かれた看板を読んで迷いなく飯屋の引き戸を開けた。その瞬間、店内外の気圧差によって正面からそよ風が吹き、少年の鼻腔にそれをくすぐるような甘い醤油の香りが広がった。

しばらく仁王立ちで香りを楽しんでから店内を見渡すと、開店休業よろしく人の気配は関係者と思われる二人ほどこしか感じなかった。何となくだが、少年は当たりを引いたと思った。

「ラッシャイ！ 坊主、そんなトコで突っ立ってないで中に入りな  
！」

声をかけられた少年は店長らしき人物が動き回っている展覽型の厨房の外側に設置されているカウンターの席に着いた。

メニューが載っているであろう冊子に手を伸ばして中を見てみると、そこには十項目ほどこしか書かれていなかった。

こたわりか、怠慢か、閃かなかっただけなのかと答えを見つけようと思案を巡らせたが、どれもおいしそうな名前だったのでそれ以上の疑問は断ち切って適当に一つ注文することにした。

「豚の角煮定食」

「あいよ。ところで坊主、見ない顔だがサクラ高の生徒さんかい？」

「今年から入学だ」

「そうかそうかそれはおめでとう。こいつはお祝いだ、飲みな」

そう言った店長は液体の入ったグラスを渡してきた。絶え間なく立つ泡によって水面に作られた小山を見てそれはパフソーダであると判断した。

## パフソーダ

飲んだ後の清涼感にかけては右に出るものがないと言われる炭酸飲料。水面にできる泡の塊が白粉たたきみたいだから『パフ』ソーダと呼ばれている。

「ありがとう」

「水をどうぞ」

そんな素晴らしいものをもらった直後、店内にいた従業員が水の入ったコップを渡してきた。

礼の一つを述べようと、少年は従業員の顔を見上げた。そして息を呑んだ。とても可愛い娘だったからだ。

言うなればその少女は、ウサギやカナリア、ハムスターなどの小動物の愛らしさに割烹着と頭巾を着せたという表現に相応しかった。

少年は正直な感想を口にした。

「可愛いな」

その言葉が出てから数秒間、二人の間は沈黙で満ちた。

その沈黙を破る代わりに、少女は顔を真っ赤にして厨房の中に隠れるという行動を起こした。

すぐに少年は頭の中で、自分の思ったことを何でもしゃべってし



まう癖の所為で辱しめられた少女に小さく懺悔して、たった一言の褒める言葉を聞いただけで全力で恥ずかしがる様子を大きく嘲笑した。

ひとしきり頭の中で笑った後で少年は、何故自分はこの少女を笑うような下卑た性格なのかとふと疑問に思い、不意に自分の過去を思い出していた。それは学生としてはさみしいものだった。

男女問わず誰からも良くて『一匹狼』、悪くて『無愛想』という印象を持たれていて、友人はあまりいなかった。

周りから距離を置きつ置かれたつの環境に身を置いていたから全てを達観視、客観視することができた。

だから少年は端から見れば笑えるもののみを笑うことができるのだという結論に達した。

合点が行ったところで、少年はパフソーダをストローでかき混ぜ始めた。そうしながら少年は自分を笑い、誰にも聞こえないように小さく呟いた。

どうせ同じだ。これから先も。

少年は感情の消えた無機質な目で渦を巻くパフソーダを眺めていると横から視線を感じた。何だろうと思ってその方向に顔を向けたら、先刻の少女が柱の陰から少年を窺っていた。

少女が何か話したげな雰囲気醸し出していたので、することもないということ少年は手招きで少女を呼び寄せた。

すると少女は嬉しそうにトコトコと歩み寄って近くの椅子に座った。

少年は改めて少女の身体的特徴を上から下まで観察してみた。

露を含んでいると錯覚するほどの輝きを放つショート小青髪、くりくりとした紅眼、身長割に大きなバスト、腰から足先までの逆台形をした脚線美など少女の持つパーツ全てが一級品だった。

少女の見目は愛情を注がれるべきものというよりも、分け隔てな

く劣情を煽る危険なものというのが適当だった。少年はというと、あまりそういうのに興味は持てなかった。

「さっきの店長との会話を聞かせてもらったよ。あたしはエクレアノ・ドラグーンって言つの。あたしも今年から入学だからよろしくね」

「そうか」

「坊主の呟いた通り、可愛い娘だろ？」

店長が口を挟みながら、少年の注文した定食を乗せた御盆をカウンター越しに渡した。

「なんなら二人共付き合ったらどうだ？ 坊主の見た目も悪くないからな」

「て、店長！」

「ガッハッハ！」

豪快に笑う店長とあたふたと慌てるエクレアノのことは既に眼中になく、少年の興味は既に豚の角煮定食に向いていた。

脂が反射してキラキラと光る角煮、良質な素材を使っていることが匂いで分かる味噌汁、御盆の中を彩るニンジンや白菜のお新香、ホクホクと暖かそうな湯気を立てる銀シャリが少年の嗅覚と視覚を刺激した。

すぐに少年は御碗を片手に持っておかずを突つつきながら食べようとした。

「ゴホン、あの、名前を聞いてもいい？」

「むん、俺か？ 俺は」

少年が名乗ろうとしたら、店の引き戸が勢い良く開かれる音がした。

店にいる三人がその方向を見ると、そこには手と膝を地面につけながら店内に入ってくる男がいた。

「邪魔するぜえ」

その男は、腕や腹は丸太のように太くて立ち上がると2・5メートルを優に越すヤマカンムリだった。

## ヤマカンムリ

体の大きさと怪力が特徴の種族。敏捷性の低さが弱点。

「シヨバ代をもらいに来たぜえ」

「オニールファミリーの奴か。しつこいもんだな。もうここはお前たちのシマじゃねえ。帰りな」

「そうは行かねえなあ。オラ、さっきの博打の負けと借金でスッカラカンなのだあ。金を寄越しなあ」

「帰れ。三度目はないぞ」

少年が話を聞く限りでは、ヤマカンムリの男は隣の賭博場で身ぐるみを剥がされたようだった。少年からしたら自業自得の一言に尽きた。

男は店内をキョロキョロと見回して、エクレアノと目が合った。

「この女、花街に売れば高くつきそうだなあ」

ヤマカンムリの男はエクレアノに近付いて、その細いウエストをぞんざいに掴み上げた。

「は、放して！」

そのまま店を出て行こうとする男を、厨房を飛び出した店長が包丁を持って追いかけた。

「クレアを放しやがれ！」

「うるさいぞお」

目一杯伸ばした手に握られた包丁が男の体に触れる前に、圧倒的なリーチを誇る男の腕の先にある掌のピンタが振り向きざまに店長の体に当たった。

モロにそれを食らった店長はカウンターに向かって一直線に吹っ飛び、後頭部を強打して、ガシャンと何かが落ちる音がした中で数回けいれんした後、気絶した。

手出しする気もなく傍観を決め込んでいた少年はエクレアノと店長を哀れみながらも、あわよくばタダ食いをしてやろうと画策し、

定食に箸をつけようと正面を向いた。

食べれることは叶わなかった。店長がカウンターにぶつかった時の衝撃で御盆が下に落ちていた。少年はびっくり厨房内の調理器具が落ちたのだと勘違いしたのだ。

少年は激怒した。エクレアノを誘拐したことで店長を気絶させたことでもなく、自分が食べようとしていたものを粗末に扱われたことに。

少年は冷たい怒りの表情を浮かべて男を追いかけた。

玄関の引き戸を蹴破って左右を確認すると、男は隣の賭博場のドアを開けて中に入ろうとしていたところだった。おそらくギャンブル場にいる胴元か金回りのいい同業者に売ろうとしているのだろう。幸い、小柄なエクレアノが懸命に暴れて抵抗していたおかげで少しの足止めができていた。

「おい待てウドの太木」

それが男の真後ろまで来た少年の第一声だった。

当然、こんなことを言われた方としてはいい気分ではなかった。ただ、男は嫌悪の感情が剥き出しの顔を振り向かせた。

「誰がうどんの買い置きだつてえ？」

それが聞き間違いでも然り。嫌なものは嫌である。

「脳ミソは空っぽだけど耳クソは満タンか。世話ないな」

「何だおめえ、やるつて言うのかあ？」

「殺るぞ。その前に、大切なものを返してもらつ」

「はあ？ おめえ、何を」

そこまで言われたところで少年は男の腹を駆け上がって顎に鋭い膝蹴りを一閃した。

エクレアノを落としてから後ろに倒れた男を見ながら、少年は満足とも不満とも取れる深い鼻息を出した。

「あ、ありがとう……」

少年はエクレアノの謝礼の言葉を意にも介さずに男の許にゆっくりと歩いて行った。

「ぐっ、何しやがんだあ！」

上半身を起こしながら怒鳴る男。

「何回死にたい？」

そこに間髪を入れずに馬乗りして、胸ぐらを掴みながらドスを利かせる少年。

「ふざけんのも大概に」

「何回死にたい？」

「ぶっ殺」

「何回死にたい？」

身長175センチの少年が2.5メートル超の大男よりも立場が上になっていることが分かるワンシーンである。

少年の視線から殺意を読み取った男は恐怖と危険を感じて、上からどかす為に手で振り払おうとした。

少年はそれよりも早く顔面に全力の前蹴りを当てて、店長がされたように後頭部を地面に打ちつけさせて失神させた。

諸悪の根源は倒した。しかし、失ったものは戻らない。ただ、この場合は定食一つであって大したことではない。

しかし、昼食にありつけられないというのは学生の身分では死活問題に匹敵することを少年は知っていた。

少年は鳴る腹の虫を押さえながら立ち上がり、フードコートまでの道を調べるためにポケットからサクラ高周辺の地図を取り出した。何故他の店に行かないのかというと、理由は二つある。店に入るとまたうやむやになって食べられないという悪い予感がしたからと《豚珍甘》と同等かそれ以上の当たりを引く自信がないからだ。

深いため息を吐いて、フードコートへ行こうと歩を進めていたら、「ねえ、お腹減ってるんだったらあたしが作るうか？」

エクレアノが提案をしてきた。

「もちろんおごるわ。助けてくれたんだからそれぐらいはさせてもらうわよ」

そう言って前に回り込んで、少年の俯き気味の顔を覗き込んで愛

らしく笑った。

少年にとっては願ってもいないことだった。

少ない小遣いを奮発して贅沢に使おうとしたが、少しも食べられなかった。仕方なくフードコートで三文飯を食べようとしたら料理を作ってくれると来た。まさに天国から地獄からの天国だった。

「頼めるか？」

「もちろん。期待しててね」

「助かる。節約になるからな」

「いいのよそれぐらい。それに、あんなこと言われたの初めてだから……」

「ん？」

「ああ、何でもないわ」

店内に入ると店長はまだ気絶していたので、椅子を四つ並べてその上に寝かせてあげた。

少年はカウンター席に座って、エクレアノは厨房内で割烹着を巻くって調理態勢を取った。

「そういえばまだ名前を聞いていなかったわね」

「そうだったな。俺は」

これは、一人の少年とその仲間たちが紡ぐ物語。

「クロガネ・クロヤマだ」

つらいことも楽しいことも悲しいことも嬉しいこともあらゆるものが織り交ざった運命の物語。

## 第二章 変態侍のち勤勉メガネ時々爆発くノ一

クロガネは幸せのダブルパンチを受けていた。それは、一週間以上経った今なお口の中に残るエクレアノの手作り肉丼の味と入学式にニンベンである自分が出席するという事実の二つだ。

特に後者の喜びが大きく、興奮で朝五時に目を覚まして支度を済まし、六時には学校に着いていた。

しかし、その幸福によるやる気の良さも空回りに終わった。ただ今クロガネは校舎の中で一人寂しく趣味の読書に勤しんでいる。

早過ぎたのだ。新入生や在校生はもちろんのこと、教師すらいなかった。

擦り切れるほどに読み尽くした専門書（金がないから新しいのを買う余裕がない）を尻ポケットに仕舞って、二階から中庭を見ようと窓に顔を向けた。

ピントを中庭に合わせる途中に、鏡の役割を果たしている窓に映っているサクラ高の制服を着たクロガネが目に入った。

しばらく眺めていると、自分がサクラ高に受かったという実感が再び湧いてきてつい顔が綻びそうになった。

すぐに自分らしくないと思って、いつもの冷めた目にして中庭にピントを合わせた。

その中心には円形に組まれた石垣の中に盛られた土に植えられた一本の巨大な満年桜があり、石垣にあぐらを掻いている着流しのサクラ高の制服と深緑色の髪のリボンマゲが目立つ男の姿があった。

### 満年桜

ゲッケイジュ皇国にしか生ることがない希少種の植物。とにかく大きくて美しく映えるピンク色が特徴であり、幸せの象徴として祀られている。

男は小型タブレット端末を見ている。盛大にニヤニヤしながら。

「……気持ち悪い」

というのがクロガネの正直な感想だが、自分と同じように早く来ている人間に興味がないと言えば嘘になる。観察しようと思って近づくことにした。

早速二階の窓から飛び降りて中庭に出た。

大きな着地音がしても、男は相変わらず引くほど気味の悪い笑顔を浮かべて画面に釘付けだった。

見るに堪えないので、男が持っている端末に目を向けることにした。

近付きながら見てみると、それは高画質大容量耐衝撃耐水耐炎工トセトラの非常に高価なものだということが分かった。

そんなものを持てるのは有名流派の宗家か中流以上の貴族かのどちらかしかない。

クロガネは、男がそれを持っていることを妬むことも良家の子息であることを羨むこともなかったが、何万冊もの書物のデータを入力しているのだろうかということを予想した。

男の目の前まで来たが、端末の画面に集中している為に気付かれることはなかった。

クロガネは近くで顔を見たことで思い出した。顔に大きな傷をこさえたこの男に見覚えがあった。実技試験のバトルロイヤルでクロガネと戦っていたのだ。

あの時は真剣な顔をしていたから今の顔との違いを見てクロガネは軽く戦慄を覚えていた。

何がここまで人を墮落させるのだろうかと思い、画面の内容が気になってきた。

「おい」

声をかけられてやっと傷の男は顔を上げ、クロガネの存在を認めた。それと同時に、顔を血の引いた蒼白色に変えた。

「何者だ！」



傷の男はあぐらを崩しながらベルトに差していた木刀を抜いて、クロガネに襲いかかった。

クロガネは瞬時に尻ポケットから抜き取った専門書を盾にして振り下ろされた木刀を防いだ。

専門書と木刀がミシミシと音を立て、その二つがくつつくのではないかと思うほどしばらくの間お互いに踏ん張り合った。

「やるな、お主……ってあれ？」

「久し振りだな、傷の男」

傷の男はきよとした様子から納得したという雰囲気を出した。

「あの時の鋭い目の男！ また相見えるとはな！」

「とりあえずそれを引っ込めろ。本が限界だ」

二人が専門書と木刀の接触面を見ると、専門書は真っ二つに切れそうなほど折れ曲がっていた。

「失敬。何分取り乱していたもので」

「別に構わんがどうしたのだ？」

「それは言えぬ」

「そうか。これ、お前のだろう？」

クロガネは傷の男が落とした端末を拾い上げ、その際に画面を見て凍りついた。エロ画像だったからだ。それも超濃厚なものだった。確かにこんなものを見ているときに人が来たら慌てるのも無理はなかった。

「……家を追い出されても頑張れよ」

「何がどうなったらそんな言葉が出る！？ それよりも返すでござる！」

「これはすごいな」

「何故逃げる！？」

「ほうほう、女体とはこうなっているのか」

次々とページをスライドして、裸の女の画像を脳内にインプットしていく。そういうのとは無縁の生活をしていたので、クロガネにとってはとても興味深いものであった。

「恥ずかしいからやめるでござる！」

「分かった分かった。ほら」

クロガネは仕方なしといった風に端末を差し出し、顔を真っ赤にした傷の男はひたくるようにして取り戻しては頭を抱えてうずくまった。

「あああ、これではセンリヨウ家の末代までの恥でござる……」

「気にするな。お前が末代だ」

ピクツと動いた傷の男はユラリと立ち上がってものすごい形相でクロガネを睨んだ。

「お主さつきから何なのでござるか？」

「人をおちよくるのは楽しいな」

「殺す」

「来るか。実技試験の時は相討ちだったからな。リターンマッチと行こうか」

「返り討ちにして進ぜよう」

腕の立つ者や戦いを心得ている者は、勝敗を分けるものは何なのかを知っている。

パワー、スピード、頭脳、技の多さ、武器の性能。どれも要因としては十分大きいが決定的ではない。

一番大切なもの。それは、気持ちの大きさである。

喜び、怒り、哀しみ、楽しみなど人によって適正は百人百様であるが、気持ちが大きければそれに伴って強くなる。

そのことをクロガネはよく分かっていた。傷の男は怒りで強くなることも、薄い感情しか持てない自分よりも強くなっていることも。

「……勝てないな」

幸いにもクロガネはプライドが皆無だったので、背中を向けて全力で逃げることを厭わなかった。

「待て！」

傷の男は右手と右足、左手と左足を同時に出す変わった走り方で追いかけた。

クロガネはその走り方を逃げながらつぶさに観察して確信したことがあったので虚空に呟いた。

「古流武術の走法、ナンバ走り……それにあの剣の腕……やはりあのセンリヨウ家が」

### センリヨウ家

リットウの家系の一つ。兵科の一つであるサムライと呼ばれる職業を専門にしていることが特徴。古代より存在する名家だが、家長が伝説の英雄の仲間の一人として行動を共にしていたことで一躍有名に。

### リットウ

白兵、特に日本刀の扱いに精通した種族。いいとこの育ちが多い。為に癖のある性格の人間も多い。

「それにしても癖ありすぎだろ」

人がいない往来はないほどの人口過密なゲツケイジュ皇国でエロ画像を見るために朝早く学校に来るような人間に癖がないとはおだてにも言えなかった。

そんなことを直接言っても火に油を注ぐだけだったので、何も言わずに十分ほど逃げ続けた。

クロガネと傷の男は100メートル11秒台後半という高校生、それも新人生としては考えられない速さで中庭と校舎を駆け巡った。「お主が生きていたら拙者の人生破滅でござる！ 大人しく死ねえええええ！」

「死んでも御免だ」

傷の男は追いかけている間中ずっと木刀でカマイタチを飛ばしており、窓を割ったり壁に穴を開けていたりした。

学校が破損していくのを気にすることもなく、クロガネは巧みに避け続けた。

二人が南側校舎と北側校舎の三階を繋ぐ空中廊下を走っている時、傷の男が飛び上がった。

「食らえ、焰突<sup>えんとつそうじ</sup>葬除！」

木刀は炎を纏い、それを突きつけられた廊下は爆発して真ん中から崩れ落ちた。

クロガネは落ちていく廊下を壁蹴りの要領で傷の男に向かって飛び、思いつきり両足を揃えたドロップキックををかました。

傷の男はそれを木刀の腹で受け止め、二人は同時に空中で後ろに飛び退き、クロガネは二階の北側校舎に、傷の男は二階の南側校舎に着地した。

二階にある二人の間の空中廊下は上から落ちてきたガレキによって連鎖的に崩れ落ち、合流するには他の空中廊下へと回り込まなければならなくなった。

余裕ができたクロガネは見た目からも余裕綽々といった風に逃げ続けた。

「待て！　そこから動くな！」

そんなことを聞くはずもなく、適当に引き戸を開けてそこに逃げ込んだ。

クロガネが入ったところは北側校舎の二階全体が図書室であるそこだった。

図書室は迷路のように複雑かつ広域であり、クロガネが興味本位で適当に抜き取った一冊も絶版になったマニア垂涎のものであったということもあって、明らかに国が建てる図書館よりも金がかかっているということが分かった。

「これはすごい」

追われている身であることを忘れてそれを読もうと机を探そうと入り組んだ図書室の中をさまよって、何とか机を見つけるとそこには先客がいた。

その先客は、真ん中分けのピンク色のおかつぱ髪と碧眼が奥にある額縁メガネが特徴の理知的で礼儀正しい雰囲気を持つ少年だった。机は八人掛けだったので相席していいか聞いた。

「座ってもいいか？」

「どうぞ」

ギリギリ聞き取れるほどか細く小さな声で許可をもらったクロガネはメガネの少年の正面に座った。

「随分早起きなのですね」

「そっちこそ」

「寮にはいたくないですし、ここだといくらでも本が読めますから」  
「気が合いそうだな。俺はクロガネ・クロヤマ。お前は？」

「サンディ・マディアントです。よろしく願います」

「よろしく、マディ」

二人があいさつを交わした直後、図書室の引き戸を荒々しく開け閉めする音がした。

「来たか。ここには誰もいないと言ってくれ」

「？ はい」

クロガネが机の下に隠れて気配を消した辺りで右手に木刀を持った傷の男がやって来た。

「そなた、この近くで目つきの鋭い黒髪の男を見ておらぬか？」

「その人はさつき出て行きました」

「そうでござるか。情報感謝する」

傷の男は急いでその場を後にして、出ていったことを確認したクロガネは机の下から這い出た。

「ありがとう。助かったぞ」

「礼には及びません」

「ところで何を読んでいるのだ？」

「工学についての本です」

そう言っただけでサンディが見せたものは、伝説の英雄の仲間の一人が原作、監修した機械工学と電気工学、重兵器の応用、発展について

記された辞書よりも分厚い書物だった。

その仲間は体が弱く、前線で戦える肉体的な強さを持ち合わせてはいなかったが不世出の頭脳を持っており、それを遺憾なく発揮する為に後方からの支援に徹していた。工学から医学まであらゆる理系学問に精通しており、仲間を生と死の狭間から救った回数<sup>デッドオアアライフ</sup>は数知れなかった。それによって定着した異名が《生死点者》だった。

そんな者が書いた本を読む人間はファンか超勤勉かそのどちらでもある者しかいなかった。クロガネはサンディがそのどちらも兼ね備える良い意味での変態である気がした。

「お前、ゴンベンか？」

## ゴンベン

賢良種族。卓越した頭脳と知識欲、やや脆弱な肉体が特徴である。《生死点者》もこれに該当する。

「この本を読んでいたらそう思いますよね。その通りです」

本をブンブンと揺らしてみせるサンディは素直にクロガネの指摘を認めた。

「だらうな……んむ」

クロガネは本に囲まれていることを思い出した所為か急に眠くなり、その場で伸びと大きな欠伸を一つした。

「眠い……」

「それなら屋上がいい休息スポットになっていますよ」

「そうなのか。では屋上で寝るか」

「いつてらっしゃい」

クロガネはサンディに見送られ、本を元に戻してから図書室を出た。

寄り道で購買部の近くにある自動販売機まで行き、起きた時の眠気覚まし用にポップコーンを買ってから屋上に伸びている多くの階段の一つを上り、その途中で眠気を誘うための専門書を尻ポケット

から取り出した。そして少しがっかりした。原形を留めていないほどひしゃげていたからだ。

### ポップコーラ

パフソーダと双壁をなす存在の炭酸飲料。口に入れた時に唾液と反応して小さな揮発をかなりの数と速さで起こし、爆発しているような感覚になる面白さで若者に大人気。

クロガネの持っている数少ない本だったが、気にすることなく自力で寝ようと考えた。図書館で一冊持ってくれば良かったとも考えたが、朝早いということで司書がおらず、借りることはできないことをすぐに思い出した。

まだ春先の朝ということで陽は浅いこともあったが、良い日和だったので気持ちよく寝ることが期待できた。

階段を上りきった先にあるドアを前にした時にそれを一枚隔てた屋上から耳をつんざく爆発音が複数回鳴った。

誰かいるのか、寝ることは可能なかを確認すべく勢い良くドアを開けて正面を見据えたところ、黒い服を着ているのか先刻の爆発で炭を身に纏ったのかは不明である全身真っ黒のヘアゴムで一本にまとめた長髪の少女が咳き込んでいた。

長髪の少女の周りにはこまごめペットやアルコールランプなどの実験道具の数々と二尺から五尺までの多くの火薬玉が散乱していた。

クロガネに気付いた長髪の少女に開口一番、

「ひゃれだひさま（誰だ貴様）！」  
と言われた。

「お前が誰だ」  
と切り返した。

ここで長髪の少女は自分のろれつが回っていないことに気付いたらしく、誤魔化さんばかりにまくし立てた。

「ひさまがひきなひひよびらをふあけたへいでひつくりしてひやくのひようほうりようにごひゃがひようじてびようふあふいたほ！」  
「貴様がいきなり扉を開けたせいでびつくりして火薬の調合量に誤差が生じて暴発したぞ……か。こっちとしてはいい迷惑だ」

「ひゃ、ひゃへれない（しゃ、しゃべれない）……ふおうひよう）どうしよう）……」

「拳で語れ」

「ひえ！？」

クロガネは指の関節をボキボキと高かったり低かったりする音を出して長髪の少女に一步一步近寄った。

長髪の少女はクロガネの姿に鬼気迫るものを感じて腰が砕けてしまい、後ろにずり下がった。

「みゃへ（待て）！ ひはふおはんへひるひゃけだきやらみゃへ）舌を噛んでいるだけだから待て）！」

目の前まで来たクロガネに手を突き出された長髪の少女は恐怖で目をつむって身を震わせた。

「というのは冗談だ。飲め」

「へっ？」

「舌を噛んでるのだろ？ これで冷やせ」

クロガネの手は殴る為ではなく、握っているポップコーラを渡す為に突き出していたのだ。

最初は何のことかと理解できなかった長髪の少女は自分の為に差し出されていることに気付いて受け取るまでに数秒かった。

「ひゅ、ひゅまはい（す、すまない）」

「そう思うなら早く治すのだな」

クロガネは寝るために頭を手で支える形にして横になった。

長髪の少女は口に含んだ冷たいポップコーラをしばらくの間放置して舌を冷やそうとした。

そうしている時も実験道具をいじくって火薬を作っているのか、何度も暴発させたり周りの火薬玉に引火させたりしている爆音の所



為で、クロガネは眠りの淵を登り降りしていた。

寝ることができなかったので、長髪の少女の方に体を向けて聞くことにした。

「何をしているんだ？」

長髪の少女はポップコーンが揮発していて質問に答えるどころではなかった。どう対応すればいいか分からずにジタバタしたり地団駄を踏んだりして試験管やビーカーを倒したり火薬玉を暴発させていたりしていたいた。

「ああそうだったな。早く飲み込め」

「つぶはあ！ おい、何だこれは！」

「それよりも良かったな、舌が治って」

「……本当だ。一応礼を言うぞ」

「それはどうも。俺はクロガネ・クロヤマ。お前は？」

「……………エリミネイト」

「名前は？ それは名字だけだろ？」

「……言いたくない」

そう言いながら、長髪の少女は目に涙を溜めて、今にも溢れ出そうな状態になっていた。

「何故？」

普通の男なら乙女の涙があれば根掘り葉掘り聞くのはためらわれるだろうが、クロガネの場合は無関係であり、容赦なく質問した。

「……みんな私の名前を笑う」

「笑えるものかどうかは俺が判断する。言え」

クロガネの命令口調に完全に気圧された長髪の少女は涙腺を崩壊させながら答えた。

「……………カラシ」

「んっ？」

「カラシだよ！ 笑いたきゃ笑えよ！ どうせあんたも笑うんだろ！ 変な名前だってよ！ こんちくしょ〜」

ついでに人格も崩壊させながら。その場にへたり込んでワンワン

と泣いて地面を何度も叩いた。

女性座りから覗かせるカラシのすらりと長い美脚が何とも魅力的であり、クロガネがそれをジッと眺めながら答えた。

「どこが笑えるんだ？ いい名前過ぎて全然笑えないんだが」

クロガネは思ったことを何でも正直に話す素直で口が軽い性格であり、笑えるものしか笑うことがない真実を見抜く目を持っている。それは他人はともかく自分がよく分かっていることであつた。

「全然面白くない」

「……本当？」

カラシが上目遣いでクロガネを見た。今は真つ黒ではあるが、なかなかの美人であるカラシがこんなことをしたら普通の男にとっては破壊力抜群だろうが、クロガネにとっては痛くもかゆくもなかった。

「ああ。すぐくつまそうな名前としか感じない」

クロガネは自分がよだれを垂らしていることに気付いていない。

「ふふつ、そんなことを言ってくれたのは貴様が初めてだ」

「食べていいか？」

盛大によだれがこぼれ落ちているクロガネが立ち上がつてにじり寄り、クロガネのよだれを見たカラシは何を誤解したのかものすごく恥ずかしがった。

「な、何を言う！ 私たちはまだそんな関係ではないだろうが！」

「もう我慢ならんのだが」

クロガネは見た目と口調が相まってクールな性格と見られることが多々ある。それは間違いではない。ただ、付き合えば分かるのだが、食い意地を張っていたり食べることに並々ならぬこだわりを持っているたりと食に対する姿勢がとてもシビアであることもまた事実である。食べ物をした時のクロガネの目にそれ以外のものが入ることがない。

今のクロガネの目は完全に食べ物を前にした時のそれであつた。カラシはカラシで、クロガネの目が欲情している時のものと勘違

いていた。

「ほら！ これを返すから我慢してくれ！」

カラシは蓋が開いたポップコーラの缶を返して、高鳴る胸を落ち着けようと再び火薬玉を作る作業に取り掛かった。

缶を手にとったクロガネは正氣に戻り、ポップコーラを一氣におった。

口の中が爆竹のように弾け、それを苦勞して飲み込む快感と寒氣が全身を震わせて、眠氣も全部吹き飛んでいった。

「これは効くな。そういえば俺、何か変なこと言ったか？」

「知りません！」

カラシがそっぽを向いてしまっていたので、仕方なく他の場所に行くことにした。

「またな、カラシ」

「ま、またな……」

頭の上に缶を乗せてバランスを取る遊びをしながらフラフラと階段を下りるクロガネ。

今日出会った運命の仲間たちは三人。

「さて、次はどこに行くかな」

次に会う仲間はどうな人間なのか、また、それを知るのは誰なのか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6189z/>

---

ヒーローメーカー！

2011年12月20日21時53分発行